

# 基調講演

## 「在宅で看取る・看取られるために」 ～全国初、“終活互助”へチャレンジ！～

シニア社会学会ガバナンス研究会座長  
武蔵野大学名誉教授  
行政書士有資格者  
地域サロン「ぶらっと」主宰  
川村 匠由

### 1. “終の棲家”的概念と種類

- (1) 概念 在宅介護・療養・終活・防災減災
  - (2) 種類
    - ① 特養 原則要介護3以上・待機者急増
    - ② 病院 3か月転院
    - ③ ホスピス 僅少
    - ④ 有料老人ホーム 重度化で退去
    - ⑤ サ高住 一時安住・施設にあらず
    - ⑥ グループホーム 認知症のみ・待機者急増
    - ⑦ 老健 3か月転院
    - ⑧ シニアマンション 施設にあらず
    - ⑨ リバースモーゲージ 相続財産没収・死後、遺族に残金請求も
- ↑
- “わが城”は自宅

## 2. 居宅の条件整備

(1) 条件整備 在宅介護・療養・終活の保障

①在宅介護 訪問介護・通所介護・短期入所

②訪問診療 訪問看護

③看取り

④贈与・相続・登記・墓守(終活)

(2) 付帯事項 防災・減災

↑

居宅の提供・多職種連携・コミュニティ再生

## 3. 居宅の提供

(1) 自宅 親子別居・高齢者のみ世帯のシェア

(2) 仮宅 賃貸マンション・貸店舗・事務所などシェ

ア

(3) 新築住宅

↑

家族・親族会議+経費負担(シェア)

## 4. 多職種連携

- (1) 有志 家賃個別負担。労務・経費シェア+カフェ
- (2) 多職種 介護職・医師・歯科医師・看護師・ケアマネジャーなど
- (3) その他 施設の社会化・病院の訪問診療+防災・減災

↑

多職種・関係機関の協力と連携

## 5. 研究プロジェクト

- (1) 実践地域 西東京市向台町、または武蔵野市境
- (2) 場所 居宅または仮宅
  - ① 居宅: 西東京市向台町4 (1階2LDK, 2階3室)
  - ② 仮宅: 武蔵野市境3 (1階2LDK, 2階1K3室, 3階1LDK2室)

↑

親子、いずれか同居+山荘(保養所)

# ①居宅

## 西東京市向台町4(市立公園に隣接)



# 間取り

2階

ベランダ	洋室	階段	洗面所・納戸
	洋室	踊り場	洋室

1階

P	玄関	階段	洗面所・浴室
庭	リビン	キッチン	和室

②仮宅  
武藏野市境3



# 間取り ～1階3LDK～

キッチン		洋室	
内玄関		階段	
トイレ ミニ 浴室 キッチン			玄関
洋室		リビング (サロン)	

玄関

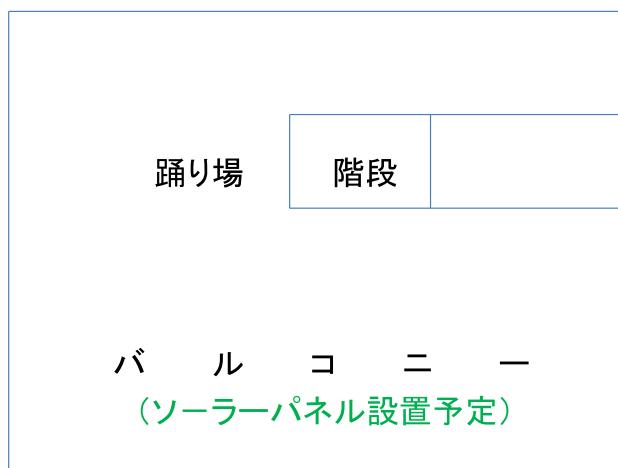
～2階1K～

1K	
踊り場	階段
1k	1k

## ～3階2DK～



## 屋上



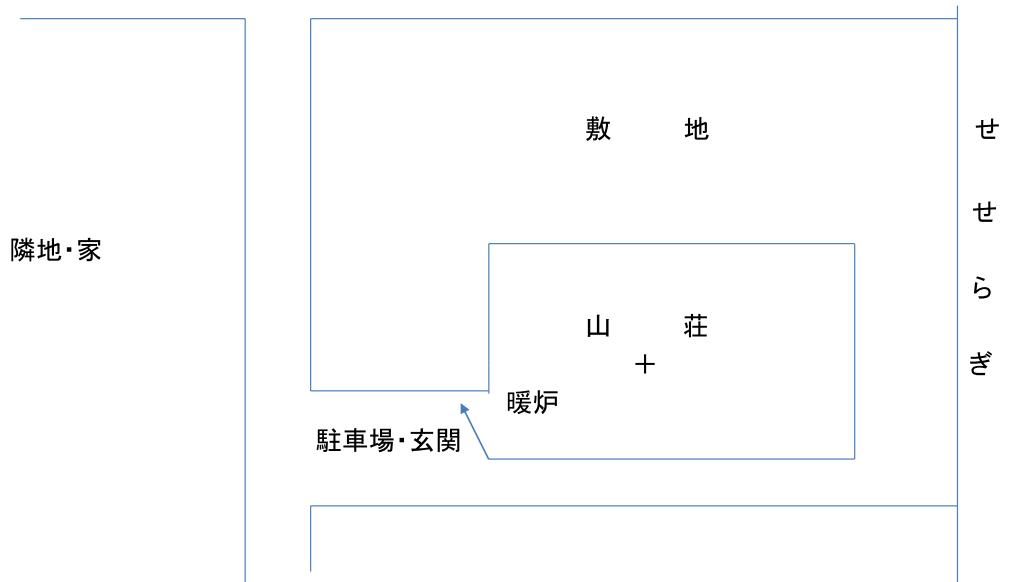
## \* 山莊(保養所)

～北軽井沢(3LDK+暖炉)。マイカーはEVに乗り換え予定～



## 間取り

2階	洋室		洋室
			洗面所
1階		階段	
	和室	暖炉	キッチン
玄関	リビング		風呂
		階段	洗面所



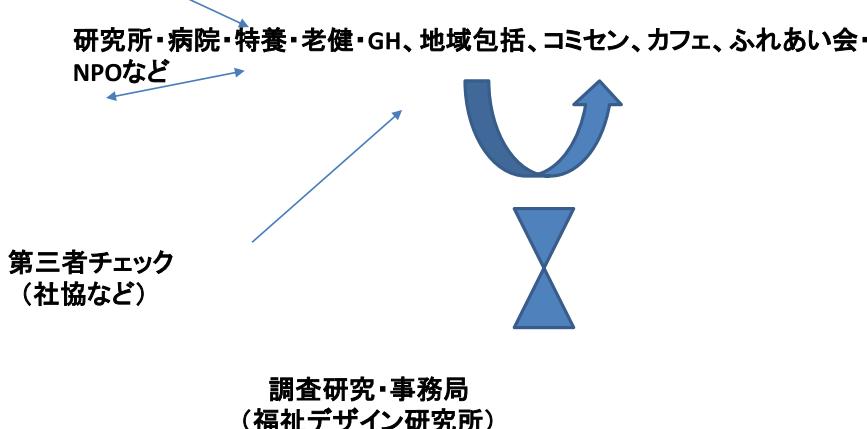
## 6. システム(仮説)

1. 趣旨 西東京、武蔵野市いずれかで有志と在宅介護・訪問診療看護・看取り・葬儀・相続・墓守・登記・防災・減災のパッケージ化
2. 地域共生・多職種連携 住民有志、病院、特養、老健、グループホーム、地域包括、コミセン、カフェ、ふれあい会など
3. 利用体系
  - (1)労務・経費 家賃1~3万円+食費・光熱費などのシェア
  - (2)カフェ 参加費100円
  - (3)第三者チェック 西東京、武蔵野市社協、NPOなど
  - (4)その他 前年度会計報告・新年度事業計画案提案の総会を開催

## 7. 組織

有志

一般



## 8. 事業目標

- (1) 2020年度 2021年3月14日(日)、オンライン・シンポジウム、シニア社会学会(研究所)
- (2) 2021年度 10月、武蔵野市くらしフェスタ、プレイス。2022年1月、西東京市・市民フェスティバルプレゼンまたはポスター展(有志公募・事務局整備)などモデル事業確定
- (3) 2022年度 6月、日本地域福祉学会中間報告
- (4) 2023年度 6月、日本地域福祉学、2024年3月、シニア社会学会最終報告
- (5) 2024年度 5月、全国先進モデル事業・著作化



ガバナンス+セツルメント運動+ソーシャルアクション

## 参考文献

1. 拙著『老活・終活のウソ、ホント70』大学教育出版
2. 拙著『介護保険再点検』ミネルヴァ書房
3. 拙著『地域福祉とソーシャルガバナンス』中央法規出版
4. 拙編著『改訂 社会保障』建帛社
5. 拙著『防災福祉コミュニティ形成のために 実践編』大学教育出版

\* 川村匡由のHP

<http://kawamura0515.sakura.ne.jp/>

## シンポジストからのコメント

石井三智子(日本社会事業大学講師):

遠距離介護からの学び

江幡五郎(元武藏野市高齢者福祉課長):

真逆な体験から

野上隆憲(有限会社 NPO地域フォーラム研究所 代表取締役)

セツルメント運動としての「終活互助」

# 遠距離介護からの学び

## 石井三智子(日本社会事業大学講師)

### 1. 遠距離介護における自らの立ち位置(特徴)

- (1)遠距離における老親・兄弟との関係(拡大家族的発想)
  - (2)健康な時からのコミュニケーションを持続させる努力  
(価値観・健康情報)
  - (3)該当地域の医療・福祉・介護についての情報のアンテナを持つ  
(行政・包括など)
  - (4)専門職(医師・看護師・リハビリのセラピスト・ケアマネジャー・介護職)との関わりを積極的に持つ
  - (5)兄弟(妹)とのチームを組む(単独でがんばらない)
- ↓
- (6)自らの(夫婦の)老活・終活に連動

### 2. 自宅でない在宅という場

(特に住み慣れた地域を離れた場合:博多実母の事例)

- (1)自宅(住み慣れた土地・家・近隣関係)
  - ⇒グループホーム
  - ⇒小規模特養での看取り
- (2)看取りの実現を可能にした要因
  - ①施設の理念:「よりあいの森」地域に溶け込む、家庭的雰囲気  
入所者・職員がその人のく身寄りになる>
  - ②訪問診療医の存在(在宅医・訪問看護師)Nクリニック  
在宅ホスピスチーム(本人・家族を主役に)



### 3. 問題提起

- (1)認知症を合併する者の意見・意思決定は誰が？ 生活場所・治療や手術を含む医療の選択・延命に関わる処置など)、本人の意向と安全を考えるバランスの難しさ・ジレンマ
- (2)非がん患者(認知症をはじめとした慢性疾患)の尊厳を保つた死(人生の完成としての)までのプロセスとは？
- (3)自らの老活・終活との関係

### ＜要旨＞ まとめにかえて

老親が同居や近隣に住んでいない場合、遠距離介護での看取りを成り立たせる条件とは何か。また、「住まい」を囲む地域と医療機関や施設がその人の住む地域外にある場合、地域に根ざした、看取りは可能であるのか。その場合、介護者の有無により「自宅でない在宅」の可能性(グループホーム・小規模特養など)。看取りの実現には訪問診療医を中心としたチーム、施設側の理念が影響したこと、加えて看取られる側の意思決定能力の有無(非がん・認知症の進展・死の質)も考慮される必要がある。

# 真逆な体験から 江幡五郎(元武蔵野市高齢者福祉課長)

1. 一般にいわれている終活の「備え」  
エンディングノート・遺言書作成、墓の準備など
2. 両親の場合、「備えなし」 父：認知症99歳、特養ホーム、母：認知症98歳病院にて没。武蔵野市内に土地・家屋を所有。両親の意思は不明だが、可能な限り在宅で最期まで生活させることを目的に家・土地は生活費、医療費、介護費に全て充当のため、武蔵野市福祉公社のリバースモゲージ制度(不動産を動産化しての貸与等)を活用  
※両親の没後、福祉公社へ全額返済・清算
3. 私たち夫婦の場合
  - (1)自宅近くの特養・老健・病院や地域包括支援センター、訪問診療・看護・介護等のフル活用。エンディングノートを毎年更新(在宅での看取りを強調)
  - (2)遺産処理等 遺言書未作成、知人の公認会計士・税理士に依頼(内諾)、没後、両親の墓地に合祀
  - (3)自転車10分内に長女家族(長女は他市地域包括支援センター主任ケアマネジャー兼生活相談員)、3分内に長男(会社員)家族

# セツルメント運動としての「終活互助」

野上 隆憲(有限会社 地域政策ネットワーク研究所 代表取締役)

1. 地域福祉計画や介護保険事業計画などをつくるコンサルタント事業で地域づくりの活動。

自分は55歳で終活への意識はまだないが、実家の母親と義両親夫婦を参考に自分の終活イメージを考えたい。

2. 自分は次男で実家では長男夫婦が母親が同居。母は85歳で孫たちに囲まれ、介護予防にも参加、絵に描いたような幸せな家庭環境で安心。

娘2人は学校卒業後、結婚、子どもと同居する未来が描いていない。

3. 義父母は退職後、マンションを購入し、夫婦2人暮らし。地域とのつながりはないが、数年前までは夫婦で毎年海外旅行に行ったり、友達を呼んで連日マージャン。が、近年、友達との交流がなくなると一気に孤立が進み、我が家との交流が中心

4. 自分は仕事の傍ら地元で地域づくりや町会活動。妻は学生時代の友人、その他趣味の活動で生活。だから将来的に妻と二人の生活なると思うが、互いに異なるコミュニティに関わりながら生活していくイメージ。ただ、孤立への怖さも。グループリビングは興味深く、「終活互助」には関心

**<講評>**

**袖井孝子(当学会会長)  
濱口晴彦(当学会副会長) 書面代読**

**シニア社会学会合同研究会  
「終活互助」シンポジウム・コメント1**

2021年3月14日

**袖井孝子(シニア社会学会会長)**

## 川村報告へのコメント

- ・「終活互助」という言葉の魅力
- ・個人の計画ではなく、現代セツルメント運動として捉える
- ・在宅看取りの3本柱
  1. 住宅：自宅の提供
  2. サービス・パッケージ：訪問看護・介護、多職種連携
  3. 死後事務：葬儀、墓、相続、防災？

## システム

1. 有志と①在宅サービス、②死後事務をパッケージ化
2. 地域共生・多職種連携：病院、特養、老健、グループホーム  
地域包括、コミセンなどと連携
3. 第三者のチェック：社協、NPO
4. 会計報告：経理の公開

## 質問

1. 防災とは何を意味するのか
2. 川村先生ご自身の家族とは了解済なのか。川村先生が亡くな  
なった後、組織として継続していくための手段は？
3. 有志とは、どのような方々を考えているのか
4. セツルメント運動として人々を巻き込んでいくためには何が  
必要か

シニア社会学会合同研究会  
「終活互助」シンポジウム・コメント2

2021年3月14日

濱口晴彦（シニア社会学会副会長）

# 強い期待

- ・今回の企画の進展具合はこれまでの成果を背景にある完成度を持って展開をしているので、今後の進展に強い期待をもっています。
- ・企画内容は時代がせつに求めていて、しかも難攻不落の課題でもあるからなのです。

## かつての互助の仕組みの崩壊

- ・思い出すのはその昔、『あゝ野麦峠』の作者である山本茂美さんが、大学での共通の恩師松田治一郎先生を囲む恒例の新年会の席で語っていたことです。郷里の信州穂高で、行方が分からなくなつた老親を探す際に、「おら家ばばあさ、どこえいっだ、、、、」と大声を出して近所を探し回ると、行方の分からなくなつていた老親はだいたい探しであてられたものだったと、山元茂美さんらしいセリフ回しで語っていたことです。
- ・今日では自治体によってはラウドスピーカーで、「どそここのだれだれさん、何歳が何時ごろからいなくなりました。お歳は、、、何歳、、、服装は、、、身長は、、、」ということで、人びとの音声ではなく、無機物を媒介に探す仕組みがある。これにはこれの利点があるのだが、上述のエピソードには、コミュニティがまだ健在で共同体の釈義を充てられていた時代の話であると切り捨ててしまうわけにいかない大切な真実が含まれているように思う。

# 核心にあるヒューマニズム

- ・その核心にあるのはヒューマニズムだ。そして今回の企画の真ん中にあるのもヒューマニズムなのである。ゆえに、往時の真実を今日にそつくり再現を期待するというだけでなく、そのエッセンスを現代にも通用する形で実際的に再構築しようという知的作業に取組み、終活コミュニティをつくりに挑むところに言い知れぬ関心を持つのである。

## ＜意見交換＞

コメントシンポジストなどの意見交換

会場からの意見

司会の総括・閉会挨拶

\* 意見交換希望の場合、閉会後、15分程度延長